

3年目の節目

(Year #3 : A New Chapter)

多喜百合子

2011年の3月以降

とにもかくにも メディアは
フクシマから警報を 鳴らしていた。
しかし 回数がだんだん減り
直接 被害を受けなかった人たちは
日常に戻った。
今も続く フクシマの事故に
思いを寄せることも
少なくなってしまった。

「3年目の節目」2014年 3月11日

記念式典が 天皇皇后両陛下、 総理大臣も出席して
フクシマでなく 東京で 盛大に開催された。
一様に「フクシマを忘れない」と語っていた。
「忘れない」
まるで過ぎ去った過去のことに対する
弔辞のようだ。

同3月25日

オランダ ハーグで 開かれた
核セキュリティサミット で
安倍首相は
「日本が溜め込んだ 大量のプルトニウムを
消費するため日本国内の原発を再稼働させますから
どうぞ ご安心ください」と 言っていた。

震災後の全原発の安全審査すら
まだ終わっていないのに。

原発事故前、放射能の許容基準量は
土壌などの汚染物質に対して
100Bq/kg
空間線量は地上1mで
1mSv/year
だった。

だから 政府と東電は
「避難先から汚染地域への 帰還は
上記の数字になるまで
除染を完了させたあと」
と約束した。

それがいつの間にか
100Bq/kg が 8000Bq/kg (80倍) まで
1mSv/year が 20mSv/year (20倍) まで健康に影響がない
と言い出した。

3年目の節目

首相は

「3年たちましたので これからは 心の復興に全力をつくしましょう。

避難中の14万人の皆さんの ほとんどは 順次もとの家に帰還できますよ。」と

20mSv/year 未満の地域に避難解除を指示したのだ。

福島県 も 呼応するかのように

県下の小学校、中学校に通達をだした。

「フクシマ産のコメを 学校給食で 子供たちに率先して食べてもらい
世界に安全を発信していきましょう」と。

今帰還予定地は

8000Bq/kg 以上の土は取り除かれている。

しかし

その はがされた土が行き場を失い

ビニールに覆われただけの状態で 仮置きされている。

放射能のことを
一番忘れたいとおもっているのはフクシマの人たちだ。
でも
もとの家に戻って
目をとじ 耳を塞いで
事故前と 同じ生活をしてみても
放射能はなくなる。
いくら頑張っても
息は止められない。
高い線量の放射能入り 空気を
体に取り込むことから
逃げられない。

四六時中続く
さらなる不安との戦いがはじまるのだ。

事故はあの日から
ずっと現在進行中。
その場しのぎの
応急処置はすぐほころび
放射能は垂れ流し状態。
貯まり続ける汚染水浄化の切り札とされた
原発大国フランス製の新除染装置も
故障続き。

フクシマの人の不安に答えて
本物の睡眠薬が処方される。
「考えすぎだ」と。

ホールボデーカウンターも
万能ではない。
セシウムやヨウ素などだけで
毒性の強い
ストロンチウムや プルトニウム は
測れない。

鬱病がふえた。家庭内暴力も増えた。

安倍首相は

「日本を元気にするため」と

詩人顔負けの美しい言葉を次々と繰り出して、

3年目で区切りをつけようとしている。

保健師まで大量に配置し

20msv/year までの地域には なんと 不安はないと

帰還を促している。

並行して

欠陥だらけの 日本製原発を

トップセールスで海外に売り込む。

「日本経済の活性化のため」と。

☆

高線量の地域で 350頭の被曝黒毛牛が

被曝の実態調査用に

民間の有志によって飼われている。

最近

獣医にもわからない原因不明の白い斑点模様が

黒毛の中にたくさん出てきた。

3年目の節目

政府は 「全頭 殺せ」と命令をだした。

3年目の節目

首相も政府も東電も

被曝したフクシマの人々を

心が壊れてしまっている 患者もろとも

高線量の土地にそっくり帰還させて

生き埋めにする気だ。

3年目の節目

日本は事故前と変わらないように

復興しましたと
日本はもう安全ですと
安倍首相が
なめらかに 笑顔とともに
宣言するために
不都合なことはすべて
手際よく消されていく。

平和利用の名のもと
日本が こつこつとためこんだ
核兵器転用可能の
「プルトニウム」を
死守するために

国民の命と引換に。

仕上げは 2020 年
東京オリンピックだ。
盛大に開くという。

注 1

bq は 物体そのものが発する放射線量の単位

sv は 人間が体内に取り込む放射線量の単位。

因みに年 **5msv** (ミリシーベルト) 以上は国際基準の放射線管理区域に指定される。

(原発建屋内 や医療用放射線現場等で働く場合 の 被曝管理上の一つの目安。

1 8 歳以上の妊産婦などをのぞく就労者のみが 可能)

これに従って チェルノブイリ事故でも 空間線量が **5 msv/year** の地域の住民はその後の住居、生活すべて政府が保障することで 強制移住した。それでもなお甲状腺がんや他の障害が多発したことはよく知られている。

注 2

2014 年 3 月 20 日 国連人権理事会の特別報告者 弁護士のアナンド・グローバー氏が 来日し、「日本政府 が **20msv/year** 以下は安全」としていることに警告を発した。すでに 2013 年 5 月国連人権委員会で日本政府に対してだされた勧告は 「① **1 msv/year** 以上の放射線量の地域に居住する人たちに対して尿検査、血液検査を含む健康管理調査を実施するとともに ② **1msv/year** に下げるため 計画を早期に策定すること③被災者支援などの政策決定に住民を参加させること」など。